

“この人に学ぶ”

第10回 津田梅子



全管連 技術参与 小泉智和

2024年、5000円札の顔は、樋口一葉から津田梅子に変わります。

6歳の津田梅子は、太平洋を23日かけて渡り、5,000kmの北米大陸を横断、日本を出て70日目(大雪で途中の長期停泊や視察あり)で、やっと目的地のワシントンに到達しました。

梅子は、留学中、多くの地を巡り、様々な人と接して刺激を受けました。

留学11年、日本語を忘れ、戻った地日本は異国の地と感じました。

明治15年帰国、未だ男尊女卑、女性が活躍できる日本ではありませんでした。

岩倉使節団で一緒だった伊藤博文の紹介で官立華族女学院に勤めますが、自分の学校を作りたい、そのためには高等教育を受けなければと、2年後に再度アメリカに留学します。

父親が明治9年、自宅に創立した「学農社農学校」への思いもあったのでしょうか、彼女は大学で生物学を専攻しますが、在学中には後進の日本の若い女性のために「日本婦人米国奨学金」制度を設立します。帰国後、日本の女性の地位向上とその教育に向けて邁進します。



新5000円札 (画像は写真を反転して使用しています)

○海を渡った5人の少女

明治4年、岩倉使節団が欧米に出かけます。目的は、①徳川幕府が倒壊して天皇親政による新政府が樹立したことを条約締結国(アメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランス・他)の元首に

伝える表敬訪問、②日本にとって不平等な条約の改正問題、③欧米先進国(15か国)の制度・文物などの視察と調査でした。

この使節団は、大使岩倉具視、副使は木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口

尚芳、各省代表、随員、通訳の総勢64人、他に43人の留学生が帯同しました。この中にアメリカに留学する5人の少女がいました。5人の姓名と身元は、

- ・津田 梅 6歳
東京府貫属士族 津田仙弥^{むすめ} 女
- ・永井 繁 10歳
静岡県士族 永井久太郎 養女
- ・山川捨松 11歳
青森県士族 山川与七郎 妹
- ・吉益 亮 14歳
東京府貫属士族 吉益正雄 女
- ・上田 悌 16歳
東京府貫属士族 上田俊 女

*捨松を除き、他の4人は、後年「子」をつけて呼ばれるようになります。

*東京府貫属：東京へ移住を命ぜられた旧幕臣や各藩士

5人の父親、兄は、官軍に負けた幕府や藩の士^{さむらい}でした。

募集に当たっては、西洋女性の活躍を知る北海道・樺太の開拓使次官の黒田清隆が女子留学生海外派遣の建議をします。最初は集まらず、2度目の募集で何とか5人が応募してきました。本人の意思ではなく、親の決断によるものでした。10年も日本を離れること、山川の母親は、「おまえを捨てたつもり、無事の帰国を待つ（松）」との思いを込め、咲の名を「捨松」に改めさせました。

*捨松は、7歳の時、“八重の桜”こと新島八重らと会津城に籠り、弾薬の運搬などの手伝いをしています。



出発前、皇后に拝謁した5人の少女
上田、永井、山川、津田、吉益
(津田塾大資料室蔵)

5人のうち上田悌子は体調不良、吉益亮子は眼病（大雪の影響）で1年後の明治5年に帰国しています。一説には、年頃でもありホームシックに罹ったと言われています。

永井繁子は、10年間の留学を終え、帰国後、アメリカ留学中に知り合った海軍中尉（後・大将）の瓜生外吉と結婚します。音楽科を卒業していたので、文部省の「音楽取調掛^{かかり}」の「洋琴（*ピアノ）奏師」に採用され、東京高等女学校（後の女子高等師範学校）兼東京音楽学校（後の東京芸術大学音楽学部）の教師を勤めています。4人の子供（退職後7人）を育てながら、当時としては珍しいキャリアウーマンでした。

山川捨松は、1年延長し11年間の留学（大学卒業）、帰国後、参議陸軍卿（後・元帥）の大山巖と結婚します。鹿鳴館外交や宮中の洋化顧問掛、慈善活動等で活躍しますが、梅子、繁子と約束した学校設立の夢を果たせずにいる負い目もあり、生涯梅子の女子教育事業に熱心な協力と支援を行いました。大正8年、スペ

イン風邪（肺炎）で死去。

○津田梅子の生涯

元治元年（1864）、父津田仙弥（佐倉藩出身、幕府の蕃所取調方・翻訳通弁）の2女として江戸牛込南町（現・新宿区）に生まれました。

明治4年（1871）、米国に出発→同5年、ワシントン着・仮宿→翌年亮子と梯子が帰国、梅子はランマン家、繁子はアボット家、捨松はベーコン家に寄留します。

* 弁務公使・森有^{ありのり}礼と留学中の捨松の兄・山川健次郎（帰国後東大教師、後・東大総長）が立会

// 15年、山川捨松と共に帰国→彼女らを送り出した黒田清隆（内閣顧問）を訪ねるも仕事の紹介は無し

// 16年、伊藤博文の紹介で下田歌子の^{とうよう}桃天女塾の教師となる。同時に伊藤夫人と娘の家庭教師と夫人の通訳を兼ねて伊藤家に同居する。

// 18年、伊藤の推薦で新設の官立「華族女学校」（後の学習院女子）の教授補になる。

// 22年、プリンマー大学に留学

// 25年、帰国、華族女学校教授に復帰

// 31年、「女子高等師範学校」（後のお茶の水女子大学）教授を兼任、

「万国婦人クラブ大会」に出席の帰途、ヘレン・ケラーに、英国でナイチンゲールに面会

// 33年、「女子英語塾」を麴町区一番町（借家：現・千代田区三番町）に設立→半年後、元園町（現・一番町）に校舎建設
* 塾設立に当たっては、アリス・ベーコン（捨松の養姉）が尽力

大正11年（1922）、小平村（現小平市）に校舎用地を取得→同12年、関東大震災、麴町区の校舎全焼→仮校舎で再開
* 関東大震災では、塾教師だったアナ・ハーツホーンが渡米し、梅子の妹と塾復興資金募集の行脚を行い、多大な尽力をしています。

昭和4年（1929）、津田梅子死去（享年64）→青山墓地に埋葬→特例で小平校舎に埋葬

// 6年、小平村の新校舎に移転

// 8年、「女子英語塾」を「津田英語



津田・アリス・瓜生・大山
（津田塾大資料館蔵）

塾」に改称→同18年、「津田塾専門学校」→同23年、「津田塾大学」となる

○津田梅子の名言

女性の地位向上と女子教育の発展に尽力した津田梅子の言葉ですが、その多くは女子生徒に向けたものです。しかし、広く男性も耳を傾けるべきでしょう。

- ・東洋の女性は、地位の高い者はおもちゃ、地位の低い者は召使にすぎない。
- ・環境よりも学ぶ意思があればいい。
- ・何かを始めることはやさしいが、それを継続することは難しい、成功させることはなお難しい。
- ・高い志と熱意を持ち、少数だけでなく、より多くの人々との共感を持てれば、どんなに弱い者でも事を成し遂げることができるでしょう。
- ・先生をするのであれ、主婦になるのであれ、どのような方面の仕事をするのであれ、高尚な生活を送るように努力してください。古い時代の狭量さ、偏屈さを皆さんから追い払い、新しいことを求めつつ、過去の日本女性が伝統として伝えてきた優れたものはすべて保つ努力をしてください。
- ・男性と協同して対等に力を発揮できる自立した女性の育成

*梅子は生涯、英文の日記を綴っており、最後の日記は「Storm last night」（昨夜は嵐）でした。

○女性の活躍に期待

津田梅子が2度目のアメリカ留学したのは、初等教育と中等教育しか受けておらず、高等教育を受けるためでした。日本にあるのはまだ高等師範学校女子部だけで、女子には大学の門戸は開かれていませんでした。尤も、日本語を忘れてしまった梅子にとっては日本語で高等教育を受けるのは無理でした。

高等師範学校女子部が設立されたのは明治19年（同23年、女子高等師範学校に改組）、女子の大学入学が認められたのは東北帝大で大正2年、女子参政権が得られたのは戦後の昭和20年、男女雇用機会均等法が制定されたのは、ほんの少し前、昭和60年です。

女性閣僚、女性知事。そして都や横浜の水道局に女性局長が誕生、全管連でも女性の社長さんや社員が活躍しているのを見て頼もしく思っています。

然しして、日本はまだ後進的で、世界156か国を対象とした「男女格差報告」（ジェンダー・ギャップ指数）（2021）では、日本は120位で、G7で最低です。

今後に期待しますが、今は能力主義の時代、女性もこれに応えなければなりません。

津田のスピリット「不安を、勇気に。逆境を、創造を灯す光に」が求められます。

○梅子ゆかりの地巡り

- ・津田塾発祥の地周辺：発祥の地は、地

下鉄半蔵門駅近く一番町で、クッキーの店「開進堂」の壁面に「Tsuda Founded Here 1900」の碑が埋め込まれています。また、梅子が教師を務めた華族女学校は、明治18年に四谷尾張町（現迎賓館正門前）に設立、同22年永田町に移転しています。地下鉄半蔵門駅の隣の永田町駅を出ると衆議院議長と参議院議長の公邸が並んでありますが、参議院議長公邸の正門前に華族女学校跡の碑が建てられています。

- ・津田塾大千駄ヶ谷キャンパス周辺：JR千駄ヶ谷駅前に津田塾大がありますが、歴史的には戦後、同窓会が鷹司邸跡地を借り受け、敵国語とされてきた英語を広めるため「津田英語会」を設立したことに始まります。以後、財団法人化、財団解散後は津田塾大が寄贈を受け千駄ヶ谷キャンパスとしています。

北側には新宿御苑が、東側には神宮外苑が広がり、近接して新国立競技場、東京体育館、国立能楽堂などがあります。

- ・小平市津田塾大学周辺：中央線国分寺駅から西武国分寺線に乗り2駅目の鷹の台駅に降り、歩いて5分程の処に津田塾大があります。梅子が校舎周りに植えた防風林は100年を経て武蔵野の原風景を醸し出しています。昭和19年には軍用機の部品製造工場が設置され、翌年陸軍部隊が入り正門にあった

塾の看板が外され軍の看板が掲出されました。これに抗議して、女子学生4名が軍の看板を校舎脇を流れる玉川上水に投棄、大問題となりました。第2代塾長星野あいは、名乗り出た生徒を守り、軍に謝罪すると共に軍看板掲出場所の架替要望を出して解決を図りました。

校内に「津田梅子資料室」が、また梅子の墓があり、生徒の間では「生涯独身だった梅子の墓参りは、一度では縁遠くなる、2度では離婚、在学中3度で呪いは解ける」との伝説があります。

玉川上水そばには、都下水道局の「ふれあい下水道館」があります。

管工事組合の皆さん、その家族の方が東京へ来られたら、小泉がご案内いたします。

申し込み：全管連事務局 無料

*参考資料

「津田梅子」

大庭みな子著 朝日新聞出版

「明治の女子留学生」

寺沢龍著 平凡社新書

次号では、松永安左工門をご紹介します。